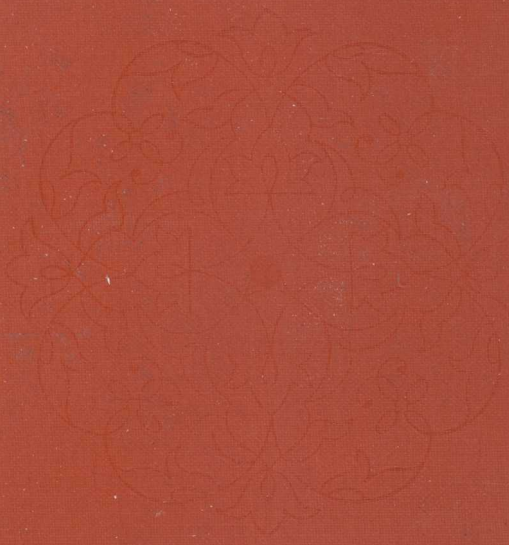

古典俳文学大系16

化政天保俳諧集

宮田正信
鈴木勝忠
校注

集英社

古典俳文学大系16　化政天保俳諧集

昭和46年5月10日　初版発行　©　定価三八〇〇円

校注者　宮田正信
　　鈴木勝忠

編集　株式会社創美社
東京都千代田区神田神保町三ノ一七ノ三都ビル

発行者　陶山巌

印刷所　大日本印刷株式会社
　　大文堂印刷株式会社

発行所　株式会社集英社
東京都千代田区一ツ橋二ノ五ノ一〇
電話東京二六五局六一一一番
振替東京一五六五三番
郵便番号一〇一番

落丁本・乱丁本は本社にてお取替えいたします

目次

解説……五
凡例……一一
落柿舎日記……一五
麻刈集……二五
枇杷園句集……四一
枇杷園句集後編……六八
枇杷園随筆……七四
佳気悲南多……九〇
東皐句集……一〇〇
斧の柄……一一
松窓乙二発句集……一三五
付　をのゝえ草稿
手折菊……一六八

蔦本集……二〇〇
続蔦本集……二三五
俳諧鼠道行……二四七
成美家集……二五六
随斎諧話……二七九
あなうれし……三三一
四山藁……三四九
葛三句集……三九一
篤老園自撰句帖初編……四一六
空華集……四四九
曽波可理……四六五
八朶園句纂……四七七
梅室家集……五一三
付　増補方円発句集
曙庵句集……五五一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

訂正蒼虬翁句集……五六〇
付　対塔庵句集
青々処句集……五八六
鳳朗発句集……六〇一

解説

老中松平定信による寛政改革のあとをうけて、十九世紀の初頭から約六十年に亘る時代。それが化・政・天保時代である。その間には老中水野忠邦による天保改革も企てられたが、内外の政情は年とともに不安の色を濃くし、藩幕政治の体制は崩壊への途をたどりつつあった。しかし政治と直接かかわりのない庶民大衆の日常生活は、その許された埒を越えようとしないかぎりは幕初以来の泰平の余慶を楽しむことができた。所謂泰平の逸民は世に溢れた。このような時代に、文芸の世界においては俳諧が彼等の日常生活の中に深く根をおろし、その普及は俳諧史を通じて正に頂点に達した。人の集まる所俳諧が話柄に供される時代であった。それだけにまた、この時代の俳諧が床屋文芸の異名にこめられた蔑視にも甘んじなければならないだけの低調さとなまぬるさに支配されたことも事実であった。

「芭蕉に帰れ」の合言葉にめざましい動きを見せた前代をうけたこの時代は、前代の遺産としての芭蕉尊崇の観念がいよ〳〵確乎不動のものとして、この時代の俳諧を口にするものの通念とさえなった。芭蕉への傾倒はもはや俳壇の全身的な傾向となった。しかしそれは、芭蕉に対する姿勢において、前代と比べて極めて異質のものであった。前代の芭蕉復帰の運動は、蕪村においてきわだっているように、それは芭蕉の域をも超えて俳諧に新たなる文芸境を樹立せんとする真摯な芸術的精進を伴ったものであった。芭蕉に求め得なかった独自の詩境が蕪村によって開かれたのはその故であった。同じく芭蕉を理想と仰いでも、この時代の俳壇にはそのような高邁な芸術精神は見られない。蕪村らにあっては心の灯として内に掲げられた芭蕉も、この時代には近づき難い祭壇の灯となったのである。この時代の俳人にとって芭蕉はもはやその句風の模倣はし得ても、凌駕し得ない絶対者的存在であり、和歌三神と同じく祭壇の中に高くまつり込まれることになった。そこには俳諧即風雅という観念的な図式が生まれ、芭蕉はその風雅の守護神の位置におかれることになったのである。芭蕉の神格化の動きはその没後間もなく直門の間にもすでにきざしていた。惟然は風羅念仏なるものをあみ出して、丈草をして「古翁墓の下にていかが見られんともはや一言を出しがたし」といわしめた。享保時代に入って後、諸国に盛んになった芭蕉塚や句碑の建立もその精神的基盤を一つにしている。かくて寛政五年芭蕉の百回忌の営まれる頃には遂に芭

蕉を神に祠るものも現われた。『随斎諧話』に伝える日向国真彦という神職などもその一例である。このような時代に、芭蕉・蕪村の域に迫り得る真摯な詩人の出なかったのは、むしろ当然というべきであろう。

もっとも、この時代の特異な俳人として一茶の存在はつとに注目されるところである。しかしその特異さも要するに一茶個人の生活感情の赤裸々な表白にとどまった。自己のおかれた特別な境遇に反射的に感応する小主観の中にあっていたずらに歎息嗚咽するにすぎず、芭蕉・蕪村らの芸術精神の高邁さには比すべくもない。乙二・東皐らもまたこの時代の特異な存在とされるが、それとても、次に述べる、この時代の中央都市俳壇の社交的環境からややずれた、東北の地方的存在として注目されるというにとどまる。

このように創作の場には詩的高揚の実は見られなかったけれども、この時代はまたそれなりに俳諧史上注目すべき一面をもつ時代であった。神格化された芭蕉への尊崇の念はおのずから芭蕉の遺墨をはじめ、その作品や伝記資料などの蒐集整理と紹介を活発ならしめ、それは当然芭蕉の周辺の人々のそれにも及び、それらについての学問的研究の道がひらかれることになった。そのいとぐちはすでに前代につけられてはいたが、それをうけて更に前進しすぐれた業績の見られたのがこの時代である。芭蕉俳諧の真髄をうかがうべきものとして重んじられ、享保時代以来すでに板を重ねて来た『俳諧七部集』は、この時代に入ると手軽な小本又は横本仕立の体裁をもって相ついで刊行され、ますますその普及度を高め、俳諧の経典たる位置を占めた。それとともに芭蕉の遺墨・資料の蒐集整理と紹介はこの時代に入ってようやく芭蕉全集編纂の段階を迎える。『芭蕉翁発句集』（安永三年刊）・『芭蕉翁文集』（安永五年刊）・『芭蕉翁俳諧集』（天明六年刊）・『蕉門俳諧語録』（安永六年刊）・『芭蕉門古人真蹟』（寛政元年刊）・『芭蕉翁絵詞伝』（寛政五年刊）などに代表される蝶夢の功績を筆頭に、桃鏡の『芭蕉翁附合集』（蓼太補正、安永五年刊）・『芭蕉翁真跡集』（明和元年刊）、闌更の『花の故事』（宝暦十三年刊）・『有の儘』（明和六年刊）・『蓬莱島』（安永四年刊）・『蕉翁消息集』（天明六年刊）などの業績の積み重ねられた前代をうけて、この時代には甘井の『金蘭集』（文化三年序）・奇淵の『芭蕉袖草紙』（文化八年刊）・仙鳧の『玉葉集』（嘉永五年刊）などが現われたが、特に注目されるのは芭蕉の作品を発句・付合・紀行・文・句合評・遺語に分けて編輯した仏兮・湖中共編『俳諧一葉集』（文政十年刊）の刊行である。今日から見れば出典を示さなかったり、考証の不行届などの欠点が指摘されるが、前代からの資料蒐集の成果を集大成したもので、芭蕉全集の最初の企画として注目すべき業績である。これは更に第二の全集として黙池編『俳諧袖珍鈔』（嘉永五年刊）の刊行を呼び、消息の部をも加えてようやく芭蕉作品の全容が整えられるまでになった。これとともに芭蕉以外の古俳人をも含めた句集の編纂も進められた。前代の三宅嘯山の『俳諧古選』（宝暦十三年刊）・蝶夢の『類題発句集』（安永三年刊）・烏明の『俳諧故人五百

題』（天明七年刊）などについで、一具の『俳諧故人続五百題』（文政十二年刊）・蕙逸の『類題名家発句集』（嘉永元年刊）などの編まれたのがそれである。

このような資料の蒐集整理とならんで一層盛んになったのが、芭蕉を中心とする古俳諧の注釈作業である。はやく越人が『冬の日』に注釈を加えた『俳諧冬農日槿華翁之抄』や、吏登の『はせを翁七部捜』（宝暦十一年刊）・蓼太の『芭蕉句解』（宝暦九年刊）などを経て、この時代は芭蕉俳諧を古典としてこれを研究注釈する学問的態度がようやく確立される。かつて芭蕉の俳諧の座に親しく列った作家としての理解に立ってその作意を解説した越人や、すでに古典として芭蕉の俳諧を見る立場にはいるが、やはり自己の作家的体験から、殊に職業的俳人が門人の問に答えてこれを指導する姿勢で説いた吏登らの域を出て、もはや全く第三者的立場から古典として芭蕉俳諧を研究対象に取り上げ、これを客観的に科学的に理解しようとする姿勢をもった研究がそれらに伍して新たにおこり、質的にも量的にも長足の進歩を遂げることになった。即ち、発句の注釈研究では前代にそのさきがけをなした積翠の稿本『芭蕉句選年考』（寛政年間成）につづいて、師蓼太の『芭蕉句解』につき師説を補ったという荘丹の『芭蕉句解参考』（文化四年刊）や、何丸の『芭蕉翁句解大成』（天保元年刊）などが現われたが、この時代に特に盛んになったのは連句を中心とする七部集の注釈であった。杜哉の『俳諧古集之弁』（寛政五年刊）・闌更の『冬の日句解』（寛政六年刊）などのあとをうけて、升六の『冬の日注解』（文化六年刊）・石兮の『芭蕉翁附合集評註』（文化十二年刊）・何丸の『俳諧七部集大鏡』（文政六年刊カ）・梶柯の『猿蓑逆志抄』（文政十一年成、万延元年刊）・錦江の『俳諧七部通旨』（嘉永二年成）などいずれもこの時代の収穫であり、曲斎の『七部婆心録』（万延元年刊）はこれら七部集注釈の集大成的労作として注目される。

そのほか芭蕉紀行の注釈に錦江の稿本『奥の細道通解』（安政五年成）・積翠の『野ざらし紀行翠園抄』（文化十年刊）、蕉門の俳文集『本朝文選』の注釈に介我の『風俗文選犬註解』（嘉永元年刊）・錦江の稿本『風俗文選通釈』（安政五年序）などが、この時代に生まれた。更に伝記並びに俳系の研究にもこの時代に曰人の『蕉門諸生全伝』（文政年間成）や春明の『誹家大系図』（天保九年刊）その他が出た。

このような研究はそもそも芭蕉の没後、その徳を慕う直門の人々によって、例えば土芳の『三冊子』や去来の『去来抄』などの如く、その遺語が書き留められることからはじまって、やがて偶像化された偉大な古人芭蕉の精神を門流に伝えようとする営みを契機として、遂にこれを客観的に古典として理解しようとする学問的研究の道がひらけて来たのである。これはこの時代の俳壇の大勢がもはやかつての芭蕉や蕪村におけるが如き真摯な芸術創造の精神と無縁のものとなった時にもたらされた、注目すべき収穫の一つであ

った。創造精神の低迷と芭蕉俳諧尊崇の念は、かえってその傍に俳諧学を興隆せしめたのである。

この俳諧学の興隆と並んで注目されるのは、俳諧のもつ本質的な文芸性がこの時代ほど見事にその効用を発揮した時代を他に求め得ない事実である。芭蕉・蕪村に比肩するに足る俳諧の詩性の高揚が見られなかったこの時代の俳諧は、その本質たる社交性の面に異常な効用を発揮することになったのである。いうまでもなく俳諧は連歌とともに連句と呼ばれる特殊な形態をもち、付合と呼ばれる独自の文芸手法をもって成り立つ文芸である。この付合という手法は言語のもつ対話的機能が、平安朝における所謂短連歌の成立を機として、独自の様式を得て文芸手法として登場したもので、連歌・俳諧の文芸としての成立と、その特殊な文芸的世界を根柢において支えるものである。連歌・俳諧は更に雑俳をも含めてこれを「付合文芸」と汎称することができる。この「つけあい」が「つきあい」と類概念であることにも明らかなように、付合文芸にとっては社交性が根源的特質であるといえる。このことは短連歌以来の連歌・俳諧の歴史的事実に徴しても明らかなところである。その俳諧を今や自らの文芸として日常的に享受することになったのが、この時代の庶民大衆であった。彼等の指導者の位置に立った多くの職業俳人をも含めて、大衆の日常生活の中にひろく行きわたったこの時代の俳諧には、もはや芭蕉や蕪村におけるが如き詩性の高揚を求めることは無理である。ここに付合文芸としての俳諧の本性たる社交的機能が異常な拡大を遂げ、第一義的な意義を担うに至るのは自然の勢いであった。

芭蕉の没後間もない頃から流行しはじめた俳人の諸国行脚の風潮は、その後職業的俳人の勢力圏拡張の実利的意義を伴ってますます高まりつつあったが、ここに至って道の修業を名目とする諸国俳人の風交が盛んになり、行脚による相互の往来も頻繁になった。俳人名録の類が編まれるようになったことも、このような気運を背景としたものであった。その中には例えば天保七年に出た『俳諧人名録』の如く、その後二篇（天保十年刊）・三篇（嘉永四年刊）と板を改めるごとに、その収載人名を当初の四百八十余人から二篇の八百四十余人、三篇の千六百余人へと増加し、当代俳人を中心にその収載範囲を他の文人墨客から遊芸人にまで拡げて行ったもののあることにもそれが窺われよう。化・政時代以後の全国的な俳壇の形成の気運は諸国俳人の行脚による相互風交によっておのずからにもたらされたものといえるが、それは偏にこの俳諧のもつ社交的機能に負うところであった。しかもここに展開したのが床屋文芸と異名される低調な俳風であった。この異名はたしかに芭蕉・蕪村らを規準としてこれを見る人の蔑称である。しかしこの蔑視は必ずしも当を得ているとはいえない。そこにはたしかに芭蕉は神格化され偶像視されて、その風雅の観念は固定化してしまってはいる。けれどもこの時代の俳諧に遊んだ庶民大衆は、芭蕉の偶像を神と仰ぎ固定化した風雅観をもったからこそ、彼等のものとなった俳諧と

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

いう文芸社交の場に雅致と品位を保ち得たのである。彼等はかつての貞門俳諧の単なる滑稽や、談林俳諧の奇矯にも、又当代の雑俳・川柳の卑陋にもおちいることがなかった。俳諧に一座し風雅に託して友誼を交わし、発句に風懐を遣ることによって、つかの間の浮世の塵を払い、清雅高尚の境地に心を遊ばせる楽しみを見いだした。それは茶を嗜み花を楽しむ心事にも通うた。それがたとえ遊芸の域を出ない生気のない微温的なものであっても、これほど清雅な文芸境が庶民大衆の日常生活に即した社交の場に開かれたことは、付合文芸史上前後にその例を見ないところである。その意味で床屋文芸と蔑視されるこの時代の俳諧は、最も低俗なるべき庶民大衆の生活の場において、付合文芸としての本性を最も見事に開顕したものということができる。例えば長州の菊舎尼はこの時代の異色の閨秀作家に数えられるが、ここに収めたその『手折菊』の如き、この時代の俳諧の社交的効用を最もよく窺わせる典型的な事例の一つとすることができよう。又所謂天保の三大家と称される江戸の鳳朗・京の梅室・蒼虹の三人はそれぞれ、俳諧のこのような特性がいよいよ顕著になったこの時代の後半期に、東西の俳壇に名声を馳せた宗匠達であった。

このようにこの時代は芭蕉俳諧の学問的研究の進歩と、庶民大衆の日常生活の中にとけこんだ社交文芸としての俳諧の効用による全国的俳壇の形成という、二つの面に大きな特色をもつ時代である。従って、この両面の特色を一身に最もよく兼ね備えた人こそ、正にこの時代に生きた典型的な俳人とすることができる。その意味で江戸の夏目成美の存在がはやくから化・政俳壇の名家として注目されて来たことは当然のことであった。その句境の清新にして雅致に富む点において、当代の名流を網羅するその交友範囲の広さにおいて、又芭蕉俳諧についての深い見識をもってする資料の紹介と、謙虚にして真摯なその学問的研究態度において、他の追随を許さない。成美は正しく当代俳人の第一に指折らるべき名家たるにふさわしい存在である。それは勿論成美の天賦の資質の然らしめたものにちがいない。しかしそれを十分に発揮することを可能にしたのは、江戸浅草蔵前の有数の札差を家業とした富裕な生活であった。自ら「俳諧独行の旅人」と称して特定の門派に偏せず、諸国の俳友と自由に交り、その来訪を迎え入れ、又これを寄宿せしめることのできたのもそのためであった。その交友の広さはここに収めた撰集の著者達の大半が成美と親しい間柄であったことにも窺われるが、又一茶の庇護者であったこともよく知られている。その清雅な句境は『成美家集』にこれをさぐるべく、『鼠道行』の小篇は成美周辺の人々の屈託のない俳席の空気をうかがうによい。『四山藁』はその文才とあわせて交友の状の一端を知るに都合よく、『随斎諧話』は又その俳諧学の片鱗を窺うに足るものである。

本巻に収めるところ、これら成美の四部のほか重厚・士朗・道彦・巣兆・乙二・東皐・菊舎尼ら、それぞれ化・政時代の俳壇に活躍

した主要な人々の足跡をうかがうに足る編著に、天保の三大家、梅室・蒼虬・鳳朗、さらに卓池の家集などを加えて、すべて十九家二十七部。中でも五明・長翠・葛三・篤老・完来・蓼松・秋挙らの句集は、今回初めて活字化したものであり、この時代を大観するに必要な基本的資料は、ほぼ尽くし得たとしてよいであろう。

なお、解説・校閲を宮田が、原稿の作成・浄書を鈴木が担当した。

付

通覧の便のため、所収俳人の系統図に没年を付して記しておく。

- （暁台）―士朗（文化9）
  - 卓池（弘化3）
  - 秋挙（文政9）
- （白雄）
  - 長翠（文化10）
  - 巣兆（文化11）
  - 道彦（文政2）
  - 葛三（文政1）
  - 篤老（文政9）
- （闌更）
  - 蒼虬（天保13）
  - 梅室（嘉永5）
- （蓼太）
  - 蓼松（天保3）
  - 完来（文化14）
- （蝶夢）――重厚（文化1）
- （白寿坊）―菊舎尼（文政9）

五明（享和3）
成美（文化13）
東皐（文政2）
乙二（文政6）
鳳朗（弘化2）

など、独立独学者のあるのも特色といえる。

凡例

一、本書は、底本を忠実に飜刻することを主旨としたが、校訂にあたり、読解の便をはかるため、左の要領に従った。

ただし、特殊な扱いをした場合は、各書の前に「例言」を加えた。

1、本文には、適宜段落を分け、句読点・濁点をつけ、会話・引用文には「　」『　』をつけ、書名には『　』をつけた。

ただし、底本に濁点のあるところには、右に（濁ママ）と注して区別した。

2、底本の誤字・当字などは、右に（　）に入れて正字を示した。

3、略字・俗字・異体字などは、原則として現行漢字に改めたが、籠―篭・瀧―滝・花―苍・富―冨・宜―宜・松―松・柳―柳―夛・嵯―嶈・霊―灵・秋―秌・声―壱・雁―鴈―厂・簾―产・磨―广の如きは原本のままとし、その面影を残すよう努めた。

4、読みがな・漢字ルビをつけて解釈を補った。

ただし、底本のルビには∧　∨をつけて区別し、ルビ濁点には∧　・濁ママ∨と注した。

5、かな遣いは底本のままとし、歴史的仮名遣いに合わぬものは、右に（　）に入れて正した。

6、底本の衍字は、本文右に（衍）をもって注した。

7、底本の片仮名は原則として平仮名に改めた。

8、漢文は、原則として、返り点・送りがなを付けず、部分的に読み下しルビを付けた。

ただし、原文が白文の場合は、その旨を注記して、校訂者がこれを加えたものもあり、底本の一部脱落には、（　）をつけて補ったところもある。

二、各書のはじめに簡単な書誌的な解題をつけた。

三、注は、本文わきに算用数字番号をつけ、各書巻末にまとめた。読みがなと漢字ルビによって解釈は補われるので、地名・人名・引用などを中心とした略注にとどめた。

四、底本を貸与し飜刻をゆるされた、天理図書館・岩瀬文庫・大礒義雄・鈴木煙浪氏に感謝の意を表する。

化政天保俳諧集

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com